



モデル三兄弟



greentea0117

モデル三兄弟

三人兄弟の末っ子だった。一番上の兄は金髪に茶色い目、二番目の兄は茶色の髪に黒い瞳、そして私は金髪に青い目だった。二番目の兄と私とは一才しか違わず、そしてとてもよく似ていた。でも性格は正反対だ。私は活発でおてんば、二番目の兄は繊細でおとなしかった。上からルーク、マイク、キャサリンといった。ルークは何かとトラブルを起こす下二人の面倒をよくみてくれた。

例えば私は、クラスメートのかばんにカエルの死体を入れたり、授業中にけんかを始めたりした。校長室につれていかれ、むっつりとしている私のため、とりあえず呼ばれるのは、ルークだった。先生たちもルークを呼びさえすれば、ことは収まると考えているようだった。ルークは学業優秀で品行方正、人望もあり、学級委員の常連だった。

泣き虫でしょっちゅう学校を休もうとするマイクを、なだめすかせて登校させるのもルークの役目だった。意地の悪い私の目から見ても、ルークは本当にやさしかった。私もルークの言うことには弱かった。ひねくれ者の私を、するんとまっすぐにしてしまう力をルークは持っていた。私は学校で友達をたくさん作った。トラブルメーカーではあったけれど、友達には不自由しなかった。

マイクは異様に絵がうまかった。いつもはマイクのことをばかにしている私も、その点だけは一目置いていた。マイクは自分の頭の中にあることを絵にしてしまえるのだ。私が言葉にできなくてもどかしく思う感情（それが学校でのトラブルの大元なのだが）を、不思議な絵で表現した。私はマイクの絵が好きで好きでたまらなかった。

あるときマイクが泣きながら、私の教室へやってきた。見ると手にはびりびりに破かれた画用紙を持っている。

「どいつ？」

私が色めき立ったとき、

「何やってんだお前ら」

運悪く、ルークが通りかかった。

「誰かが、マイクの絵を破いた」

私は息巻いた。

「そいつをやっつけに行く」

「ふうん」

次の瞬間、ルークはがっちりと私を羽交い絞めにした。

「お前、これ以上問題起こしたら、退学だぞ」

「そんなことどうでもいい、離せ」

私はわめいたけれど、ルークの腕は機械のようにがっちりと私を離さない。

「もういいよ、キャサリン」

マイクはまだ目に涙をためて言った。

「キャサリンが退学になったら困る」

でもこの日を境に、マイクはますます学校へ行かなくなった。困った母さんはマイクと私を別の学校へ移すことにした。私はルークも一緒じゃないと絶対に行かないと宣言し、マイクと二人、ずっと家に籠城していた。やがてルークが説き伏せて、三人で新しい学校の見学へ行くまで。

新しい学校の教室は私が幼稚園のころいた教室を思い出させた。カラフルでいろんな道具が置いてあって。机もきっちりと並べてなくて、生徒はおもいおもいの場所に座っているようだ。

「マイクはどうかわからないけど、私はここに来たって変わらないよ。ここに来るんだったら、ルークも一緒じゃなきゃ」

私は言った。

「俺は正直、どっちでもいいよ」

ルークは言った。

「でも三人、一生くっついているわけにはいかないんだぞ」

私はルークを見た。ルークがそんなことを言うなんて、信じられなかった。

「見損なったよ、ルーク」

私は言った。傷ついていた。でも見ればルークの方が、顔を歪めていた。

「傷ついたのは、私たちの方よ。そんな顔しないでよ」

「やめろよ、キャサリン」

マイクがおろおろと言った。

このことをきっかけに私とルークの間に小さな溝ができた。最初は、きっとルークがなんとかしてくれると思っていた。でも結局ルークは元いた学校、私とマイクは新しい学校へ移ったので、私たちが学校で問題を起こしても、ルークが飛んで来ることはなくなった。

「私たちの面倒をみなくてよくなって、ほっとしてるんでしょ」

家に帰れば、私はルークにそんな憎まれ口をたたいた。

「そんなことあるわけないだろ」

ルークは確かになんとかしてくれようとした。ルークだって、また元通りの私たちに戻れると思っていたのだ。でも私が大好きな釣りにルークが連れて行ってくれても、なんだか前のようにはしゃげなかった。何もかもがいやになったとき私が逃げ込む木の上に、いつものようにルークが迎えに来てくれても、差し出されたその手をつかむことができなかった。本当は差し出したくてうずうずしている右手を、左手がなぜだか必死に押さえていたのだ。いつも三人、団子のようにぎゅうぎゅうと固まっていた私たちは、一人と二人になってしまった。

新しい学校で、私はなぜか静かな子になっていた。そもそも自由な雰囲気のある学校で、無理をしなくても馴染めたからかもしれないし、ルークがいないということが私を意気消沈させ、またブレーキをかけたのかもしれない。でも内心私はくそくらえ！ と思っていた。その黒い気持ちは、いつも私のどこかにあって、一見おとなしく過ごしている私の中で、徐々に大きくなっていった。

マイクはそのことに敏感だった。私が何をしでかすか恐ろしくて、逆に毎日学校へ来るようになった。ある日私は突然椅子を担いで、窓へ放り投げた。ガラスは気持ちがいいくらい見事に割れ、椅子は三階下の地面に落ちて砕け散った。

「ほーほー！」

私は久しぶりに気分が晴れ晴れとした。ルークの代わりにマイクが飛んできた。マイクは落ちたのが私じゃなくて椅子だと知ると、安心してかおんおんと泣きだした。私は得意気に先生を見た。元の学校だったら校長室へ行って、それから即、退学だろう。でも先生はこう言っただけだった。

「この手袋をはめていらっしやい。後片付けするんです」

私は割れたガラスに触れるのが嬉しくて、先生についていった。そして先生と一緒にガラスや椅子の破片を、袋に入れた。

「先生、ごめ、ごめ、ごめ、」

私は言い淀んだ。泣き止んだマイクが、横で突っ立っていた。

マイクは絵を描いた。マイクが頭の中にあることではなくて、実際のことを絵にするのは初めてじゃないだろうか？ それはいつもの複雑な線画のような絵では無く、まるで幼児が描いたような絵だった。水色のガラスが飛び散って、かかしの絵のような私と先生とマイクがいた。でも私は一目でその絵が好きになった。ガラスの水色がとてもきれいだったから。

マイクと私は、手を繋いで学校へ行く。ルークはいないけれど、私たちは私たちがなんとかやっていかななくては。マイクは線画だけじゃなくて、色の絵をよく描くようになった。線画は、すごい！ というかんじだけれど、反対に色の絵は、とっても拙い。マイクはたくさんの色の絵を私にくれた。私はそれをバインダーに挟んで持ち歩いた。

そういうわけで、三人は再結成した。私はちょっとは成長したつもりでいたけれど、モデルの仕事をしっかきにまたルークに甘えるようになった。マイクと私は分身のようだった。でもルークはちょっと高いところから、私のことを理解してくれるのだ。そう、ほんとはわかっていた！

いつだってルークは私やマイクのことを、ちょっと高いところから見てくれていたのだ。モデルの仕事は三人がばらばらだと、あまり面白くなかった。ポージングだってぎこちない。でも私たちが所属している事務所が、

「あんたたち、三人でちょっとポージングしてみて」

と三人で映ると、私たちの体は自由に動いた。自由に、しなやかに！ それは踊っている時の気分 に似ている。でももっと、楽しい！ 私たちはひと時、うなぎのぼりで人気が出て、高級ブランドのモデルをつとめるまでになった。でも私は自分の進路に密かに悩んでいた。ルークは弁護士、マイクは高校を卒業したら美術学校へ行くつもりだ。ずっと三人で遊ぶみたいにモデルをするのは、いつか終わりが来る。私は高校を出たらどうしたらいいのかさっぱりわからなかった。いつだって誰かに理解してほしいと叫び、ルークやマイクに甘えていたけれど、自分がどんな道に進みたいか、そんなことすらわからないほど何も見えちゃいなかった。モデルの仕事は好きだけれど、三人でやればこそ。一人でやっていくほど、の世界を好きにはなれない。

「モデルの仕事、好きになれないって、どうして？」

スタイリストのケリーは一回り年上で、スタイリストなのにすごく太っている。

「いがみあいが多いし。ねたみが渦巻いてるし」

「そうねえ、でも気づかなかった？ どこでもそうよ」

「そうね」

私は溜息をついた。

「うんざりしてる」

「モデルの仕事に？」

「ううん、学校とかもそうだったし。マイクとくっついて、マイクが絵を描くのばかり見てた」

「もうそうばかりもいかないでしょう」

「うん、それはわかってるんだけどさ」

私はケリーが編み上げてくれた髪を見た。細かな編みこみが耳の後ろから頭頂部へとカーブを描いている。

「なんかさ、私、もっと違うことしたいような気がするんだよ」

私は言った。

「なんかもっと、なんていうか……」

私は言葉を探した。

「自分で何かしたいっていうか」

「何か？」

「そう。何かはわからないけど」

ケリーは私の頭のヘアピンをぐっぐっと押しながら、

「いいじゃない、それ」

と言った。

「そうしたらいいじゃない」

「でもそれが何かわからない」

「そういう時のために大学があるんじゃないの？」

「でも私、ルークもマイクもいない学校って、なんかあんまり行きたくない」

「はあ」

ケリーは大きな息をついた。

「売れっ子モデルが、ここまでだめな子だって思わなかった」

はっきりとしたケリーの言葉に思わず笑った。

学校を見回す。私は三年生になり、マイクはとうとう一足先に卒業してしまった。卒業式の日、マイクは私に行った。

「美術学校にいつでもおいで。また二人で手を繋いで歩けばいい」

私は首を振った。

「そうはいつでも、この学校ではもう私一人だし。ちょっと考えてみたい、私も卒業したらどうするのか。一人で」

「ほほう」

マイクはほくそ笑んだ。

「なんかつままないね」

マイクは言った。

「つままないよ」

私も言った。

「でもつまらないことにもなれないとだめ」

「どうしてそんなつままないこというの？」

マイクは言った。

「はちゃめちゃでもいい」

「だめだよ」

私は兄弟の一人として、初めて責任感を持って言った。